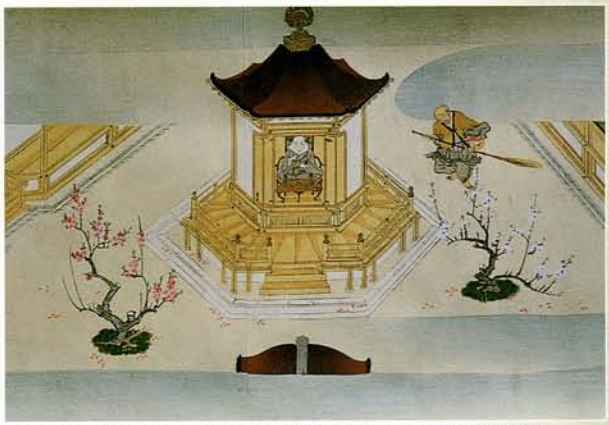
東本願寺（真宗本廟）の歴史



『本願寺聖人伝絵』より「廟堂創立」図。聖人入滅後10年を経て建立された廟堂である

大谷廟堂

一二六二（弘長二）年一一月二八日、九〇歳で入滅された親鸞聖人は、京都東山・鳥部野で荼毘にふされ、大谷の地に埋葬されました。ここには廟堂が建てられ、堂内には聖人の御真影（木像）が安置されました。この「大谷廟堂」が、現在の東本願寺（真宗本廟）の始まりです。

本願寺の成立

大谷廟堂は、親鸞聖人の娘・覚信尼公と関東の門弟たちとの協力によって建てられました。廟堂の留守は、覚信尼公から長男の覚恵師、そして孫の覚如上人へと受け継がれます。第三代・覚如上人は、大谷の廟堂の呼称を「本願寺」とされました。その後本願寺は、宗祖親鸞聖人が得度された青蓮院（天台宗）の末寺となり、内陣に護摩壇を据えるなど、天台宗的な色合いがあらわれてきました。

青蓮院（京都市東山区）。親鸞聖人御得度の間

蓮如上人の再興

第七代・存如上人は、本願寺に宗祖聖人の御真影を安置する御影堂と、阿弥陀如来像を安置する阿弥陀堂の両堂を建立し、また、近江国（滋賀県）・北陸方面への教化を推し進められました。

一四五七（長禄元）年に第八代を継がれた蓮如上人は天台宗的な仏事や荘厳を廃し、親鸞聖人の著作である「正信偈」・「和讃」による勤行形式を確立するなど、当時「参詣の人一人もみえさせたまわず」という状況にあった本願寺の改革に着手されます。そして、近江地方にも積極的な教化を行うことで、多くのご門徒とつながりをもっていかれました。

しかし、これに危機感を抱いた比叡山の衆徒によって、本願寺は破却されます。近江に逃れた上人はこの後、越前国（福井県）吉崎に坊舎を開き、積極的な活動を続けられました。特に「御文」といわれる手紙によるわかりやすい教化や、寄合（講）を組織することで、数多くの人びとに親鸞聖人の教えを広めていかれたのです。

第8代・蓮如上人

吉崎が栄えると、再び既存の宗教などとの軋轢が生じ、それが一向一揆となって広がりました。蓮如上人は戦いの拡大を嘆いて吉崎を離れ、河内国（大阪府）へと移り、さらに念仏の教えを広められました。

その後上人は、破却された本願寺の再建を目指して、京都山科へ向かわれます。山科では一四七八（文明一〇）年から六年の歳月をかけ、全国のご門徒の力を集めて御影堂・阿弥陀堂をはじめとする伽藍が整備されました。周囲には、ご門徒をはじめ商人や職人が集まって寺内町が作られ、「荘厳ただ仏国の如し」といわれる繁栄を見せたのです。

お浚えの「御文」（蓮如上人筆）

石山合戦

一五三二（天文元）年、本願寺の勢力拡大を恐れた法華宗徒らによって急襲された山科本願寺は焼け落ち、第十代・証

山科本願寺御影堂復元模型（国立歴史民俗博物館蔵）

如上人は摂津国（大阪府）大坂（石山）へと逃れ、大坂を本山と定められます。山科同様に、本願寺の周辺に寺内町が発展していきました。

しかし、十一代の顕如上人のころ、再び本願寺に危機が訪れます。天下統一をねらう織田信長が、恵まれた立地にある大坂の明け渡しを要求してきたのです。本願寺側はこれを拒否し、一五七〇（元亀元）年、戦いの火蓋が切られました。世にいう「石山合戦」です。本願寺は全国のご門徒や毛利氏ら諸大名の支援を受けて信長に対抗しましたが、一五八〇（天正八）年ついに和睦し、大坂の地を信長に明け渡しました。

大坂本願寺寺内町想像復原模型（難波別院蔵）

東西分派

大坂を明け渡して二年後、「本能寺の変」で信長が没した後、豊臣秀吉は本願寺を優遇し、大坂天満を経て京都・堀川七条の地に土地を寄進します。しかし、京都に移転した直後の一五九二（文禄元）年、顕如上人が亡くなられました。跡を継がれたのは長男・教如上人でしたが、翌年には秀吉の裁定で弟の准如上人に職を譲り、隠居させられます。しかし、教如上人は一六〇二（慶長七）年、徳川家康から烏丸六条の土地を寄進され、本願寺を別立し、教団も二分されることとなりました。これを東西分派と呼びます。分派の背景には、石山合戦の退城派（顕如）・籠城派（教如）の対立があったと言われています。こうして本願寺は二つに分かれ、烏丸の本願寺を「東本願寺」と呼ぶようになったのです。

第12代・教如上人。信長との徹底抗戦を訴えられ、後に東本願寺を分立された

その後、東本願寺とその教団は、日本を代表する仏教教団としての地位を確立します。御影堂・阿弥陀堂をはじめとする建造物は、江戸時代を通じて四度の火災に遭い、そのつど再建されて、現在の両堂は一八九五（明治二八）年に落成したものです。